

## 積貞棟 1・2階の看護部門一元化体制への新しい取り組み

(文責 積貞棟 1・2階 師長 嶋野玲子)

新病棟（積貞棟）1・2階は、外来がん診療部門、入院がん診療部門として、放射線治療・化学療法・手術療法・内視鏡治療など様々な治療を併用し集学的がん診療を行い、京大病院がんセンターの中でも患者中心のチーム医療を実践している部署です。看護領域も患者さんが高度な治療を安全に受けられるよう、診療介助や種々の検査説明、抗がん剤治療と病棟ケアの実践と病棟外来連携に取り組んでいます。

### 積貞棟 1・2階の概要

#### <看護単位の概要>

看護要員：看護師長 1名 副看護師長 5名（認定看護師 3名） 看護師 26名  
看護助手 3名 看護事務 1名

看護方式：固定チームナーシング

#### <病棟・外来の特徴>

積貞棟 1階：13診察室、処置室、外来化学療法治療室 29床、外来化学療法小児ゾーン  
積貞棟 2階：36床（放射線治療科 17床、がん診療部 15床、共通 4床）  
総室 4室、重症個室 3室、差額ベッド 17室

積貞棟 1・2階の看護スタッフは、外来と病棟を1看護単位として新しくスタートし、移転後半年が経ちました。医師・看護師・薬剤師などのすべてのスタッフが理想的ながん医療を目指して、患者さん中心のがん診療が実践できるよう努力しています。京大病院のがん治療は非常に高度であり専門化しております。また在院日数の短縮で、多くは外来で治療を行うようになってきています。看護スタッフも、1・2階を1つのユニットとして継続看護を行うことを目的に、外来・病棟体制を理解しローテーションを行っています。

積貞棟 1階外来がん診療部は、放射線治療科、肺がん・中皮腫ユニット、乳がんユニット、食道がんユニット、膵がんユニットを設け合同体制で診察を行っています。そして外来化学療法部は、外来で抗がん剤治療を継続する患者さんの診療を行っています。看護師は初診の患者さんやセカンドオピニオン、継続看護の必要な患者さんへの対応へと非常に忙しく介助や処置を行っています。外来化学療法治療室は、29台のリクライニングシートを有しゆったりとしたスペースを確保し、医師、薬剤師と連携しながら、安全安楽に抗が

ん剤治療が行えるように専門的知識、技術を持って看護にあたっています。外来化学療法治療室のアメニティーも充実しており、患者さんは音楽を聴きながら治療を行っています。

積貞棟2階入院がん診療部門は、放射線療法・化学療法・外科療法・内視鏡的治療など様々な治療を併用し、集学的がん治療を実践するがん治療専門病棟です。診療科は放射線治療科・消化器内科・呼吸器内科・乳腺外科・消化管外科・泌尿器科など多岐にわたります。

## 専門性の高い看護師の配置と活動

病棟・外来にはがん看護の専門分野に関する知識・技術を持った「がん化学療法認定看護師」「放射線治療認定看護師」がいます。それぞれの治療の看護について相談できる環境にあり、様々な部位にがん治療を受ける患者さんをいろいろな視点から観察し必要な看護を提供しています。看護活動として、病棟内ではいくつかのグループに分かれて小集団活動を行っています。例えば今年は、放射線治療のクリティカルパスの作成、化学療法における副作用の口内炎に対するケア、緩和ケアとして浮腫に対するケアなどを行っています。患者さんと実際に関わるなかで学ぶことも多くあります。それをチームで共有して患者さんに合わせたケアを考え実践しています。

病棟で、最後まで治療をあきらめずに頑張っておられた患者さんが、家族の一途な介護により在宅で看とられたケースを経験することができ、スタッフも成長できました。患者さんは、がんと共存し治療法や対処法を選択しながら、障害や副作用、時には予後を受け入れて行くこととなります。がんの病名や病態の告知は、患者さんや家族に大きな精神的負荷を与えますが、治療の必要性や自分の状況を理解するために十分な説明を受け、納得できる治療、結果を期待しておられます。治療を頑張っているこのような患者さんの思いを一緒に共有し、緩和ケアチーム・地域ネットワークの横断的な介入で、精神・心理的にも社会的にも支援を受け、安心して治療に専念できる環境で、最善の治療を受けていただけることを目指しています。看護スタッフは皆優しい雰囲気、笑顔で働くことのできる部署です。病棟外来連携や化学療法部との連携もまだ始まったところですが、患者さんは病棟で関わった看護師や専門看護師がいることに対して非常に満足をされています。外来は病院の顔と言いますが、不安を抱えて外来受診する患者さんが相談しやすい雰囲気であるだけでどんなにか、救われた気持ちになるでしょう。患者さんの話をよく聞き、入院前から関わって、個別の問題を明確にして病棟看護へつなげて患者さんを見てこそ看護を実感できると考えています。

## 今後の展望

がん看護は、先ず疾患をしっかりと理解し、がんという疾患に伴い発生するさまざまな心身の症状や反応に対し、観察しアセスメントし、ケアを行い記録することはもちろんですが、経過を通じて生じる心身、社会的、心理的、経済的な問題を収集し、適切な対処を考え、介入を行わなければなりません。そのためには初診時からかかわる外来の看護は非常に大切であると考えています。患者さんの持つ課題に早期から着目をし、適切な職種と連携をとり、チーム医療を推進し患者さんにとっての最良の医療の提供を行うことが大切です。看護師はこれまで以上に患者さんの情報収集と並行して、様々ながん種の疾患理解や化学療法・放射線療法のレクチャーや学習会など行い知識を深め、安心・安全で質の高い看護を提供できる環境を整えているところです。

大学病院でのがん治療は、高度先進医療の現場で複雑な医療技術が駆使されるために、システムも複雑化し、先駆的な治療などは実践レベルでのスタンダードがないことが多くあります。また教育機関であるため、研修医をはじめとする教育途上のスタッフも多いという特徴があります。看護師も今後ももっと教育体制や看護体制を整え、療養パスやパンフレットなどの充実を図り看護を提供し、実践や研究を発信できるよう進歩していきたいと考えています。